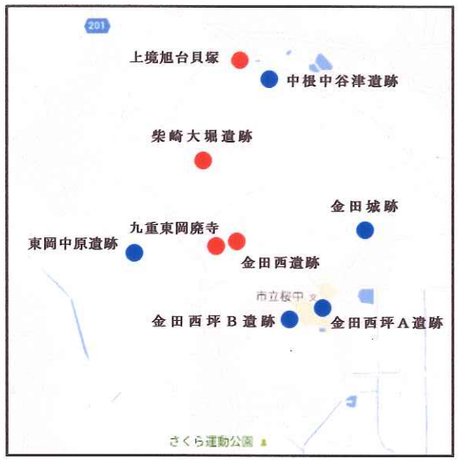
平成28年３月12日（土）　　発掘調査遺跡現地説明会資料
中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

金田西遺跡・九重東岡廃寺
上境旭台貝塚・柴崎大堀遺跡

所 在 地：九重東岡廃寺　　つくば市東岡字海道端252－1番地ほか（調査面積：8,556㎡）
　　金田西遺跡　　つくば市金田字西原1891番地ほか（調査面積：7,680㎡）
　　上境旭台貝塚　　つくば市栄字毘沙門439－2番地ほか（調査面積：1,162㎡）
　　柴崎大堀遺跡　　つくば市柴崎字大堀903－2番地ほか（調査面積：5,253㎡）
調査期間：平成27年４月１日～平成28年３月31日
委 託 者：独立行政法人都市再生機構
調査機関：公益財団法人茨城県教育財団（つくば中根事務所）
　　TEL：080-3405-8217　http://www.ibaraki-maibun.org

＜遺跡の立地と周辺の遺跡＞

金田西遺跡，九重東岡廃寺，上境旭台貝塚，柴崎大堀遺跡は，つくば市の北東部に位置し，桜川右岸の標高約24～26mの台地上に立地しています。上境旭台貝塚は旧石器時代と縄文時代後・晩期を主体とした遺跡で，周辺の東岡中原遺跡でも旧石器時代の石器が，隣接する中根中谷津遺跡では縄文時代後期の集落跡が発見されています。つくば市金田付近は，古代は常陸国河内郡衙域に比定されており，郡衙に関連した集落跡と推測されている東岡中原遺跡をはじめ，国史跡に指定された正倉域と推定されている金田西坪Ａ・Ｂ遺跡，郡庁院や居宅などに推定されている金田西遺跡，郡寺跡に推定されている九重東岡廃寺が広く知られています。柴崎大堀遺跡は室町時代の堀跡で，近隣の金田城跡との関連が指摘されています。つくば市金田付近は，旧石器時代から室町時代にかけて人々の様々な生活や活動の痕跡が数多く残され，特に奈良・平安時代においては，地域の政治的な中枢域として重要な役割を担っていたと考えられています。



遺跡の位置（縮尺1/2500　Googleより引用）

＜九重東岡廃寺・金田西遺跡の調査成果＞

九重東岡廃寺では，奈良・平安時代の竪穴建物跡25棟，掘立柱建物跡17棟をはじめ，土坑，井戸跡，溝跡などを確認しました。遺物は，奈良・平安時代の土師器（坏・甕），須恵器（坏・高台付坏・蓋・仏鉢・短頸壺・甕），瓦，金属製品（鎌）などが出土しています。須恵器坏には，「積」「常」「市」「私」などの墨書が見られます。今回の調査区では，明確な建物の配置状況や区画溝などは確認できませんでしたが，調査区東部で確認した掘立柱建物跡群が寺域の北辺にあたると考えられます。

金田西遺跡では，奈良・平安時代の竪穴建物跡37棟，掘立柱建物跡16棟，粘土採掘坑１基のほか，土坑，井戸跡，溝跡，柱穴列などを確認しました（平成28年２月現在）。遺物は，奈良・平安時代の土師器（坏・皿・鉢・甕），須恵器（坏・高台付坏・蓋・高台付皿・盤・短頸壺・甕・コップ形土器），灰釉陶器（長頸壺），瓦，石製品（紡錘車・温石），金属製品（刀子・鏃・鎌・鉄鉗・巡方）などが出土しています。須恵器坏には，「寺」「市」などの墨書が見られます。竪穴建物跡や小形の掘立柱建物跡が多いこと，土師器や須恵器などの生活に関わる遺物が多く出土していることなどから，郡衙や寺院に関わった人々の集落跡の一部であると考えられます。「寺」の墨書をはじめ，仏鉢や温石，瓦，役人の身分を表す腰帯具の一部である巡方などの出土は，郡衙や寺院に関わる遺物であり，両遺跡の性格を裏付けるものと言えます。今回の調査は，古代の河内郡衙周辺の様相を知るための貴重な手がかりとなりました。

＜上境旭台貝塚の調査成果＞

今年度は，旧石器時代の石器集中地点１か所，縄文時代後・晩期の竪穴建物跡２棟，土坑約400基（土坑内貝層15か所を含む），斜面貝層１か所のほか，中世の火葬施設，近世以降の溝跡などを確認しました。旧石器時代の石器集中地点では，広域火山灰として知られる姶良丹沢火山灰（約29,000～26,000年前）よりも下位のローム層から，ナイフ形石器，掻器，削器，彫器，石核，石刃，剥片などが出土しています。今後，科学的な火山灰分析などを進め，詳しい年代を検討していきます。縄文時代後・晩期の深さ1.5～２mの円筒状の土坑からは，縄文土器と共に，ヤマトシジミ・ハマグリ・オキシジミなどの貝殻，たくさんの獣骨や魚骨を検出しました。斜面貝層からは，縄文土器（深鉢，浅鉢，製塩土器），石器（石鏃，敲石），石製品（玉），土製品（耳飾り，土偶），骨角製品（鏃，装身具），貝製品（貝輪）などが出土しています。

今回の調査で確認した旧石器時代の石器集中地点は，つくば市内はもとより県内でも類例の少ない時期の石器群であり，東北産の頁岩と信州産の黒曜石，在地産の瑪瑙を利用したナイフ形石器，掻器，削器，彫器などの道具類，石刃，石核，剥片など石器製作に関わる資料が共伴している点は，石器集中地点の性格を考える上で重要と言えます。また，斜面貝層から出土した貝，獣骨，魚骨，種子などは，縄文時代の後・晩期の生業や食料獲得のあり方を如実に物語り，当時の環境復元にも極めて有効な資料となります。

旧石器時代の石器群

縄文時代の竪穴建物跡と出土した土器

谷部に形成された斜面貝層

貝殻と共に捨てられた縄文土器と獣骨

＜柴崎大堀遺跡の調査成果＞

今年度は，昨年度に調査した堀跡の東側を調査しました。室町時代と考えられる堀跡及びその両側に延びる土塁２条をはじめ，縄文時代の陥し穴，時期不明の土坑，溝跡を確認しました。堀跡は東西方向に延び，長さ約150m，深さ約２mで，断面形はU字状を呈し，底面から深さ約４mの深堀が２か所に構築されていました。柴崎大堀遺跡は，以前から南東約800mに位置する金田城跡との関連が指摘されています。台地を分断するように谷などの自然地形を巧みに利用して構築された堀と土塁は，金田城を囲繞する東側の低地や南と西側の谷と一体になって，北側の台地の障壁となり，城の防衛の要として重要な役割を果たしていたと考えられます。

大規模に掘り込まれた堀跡（東から）

第26号掘立柱建物跡

第30号掘立柱建物跡

第31号掘立柱建物跡

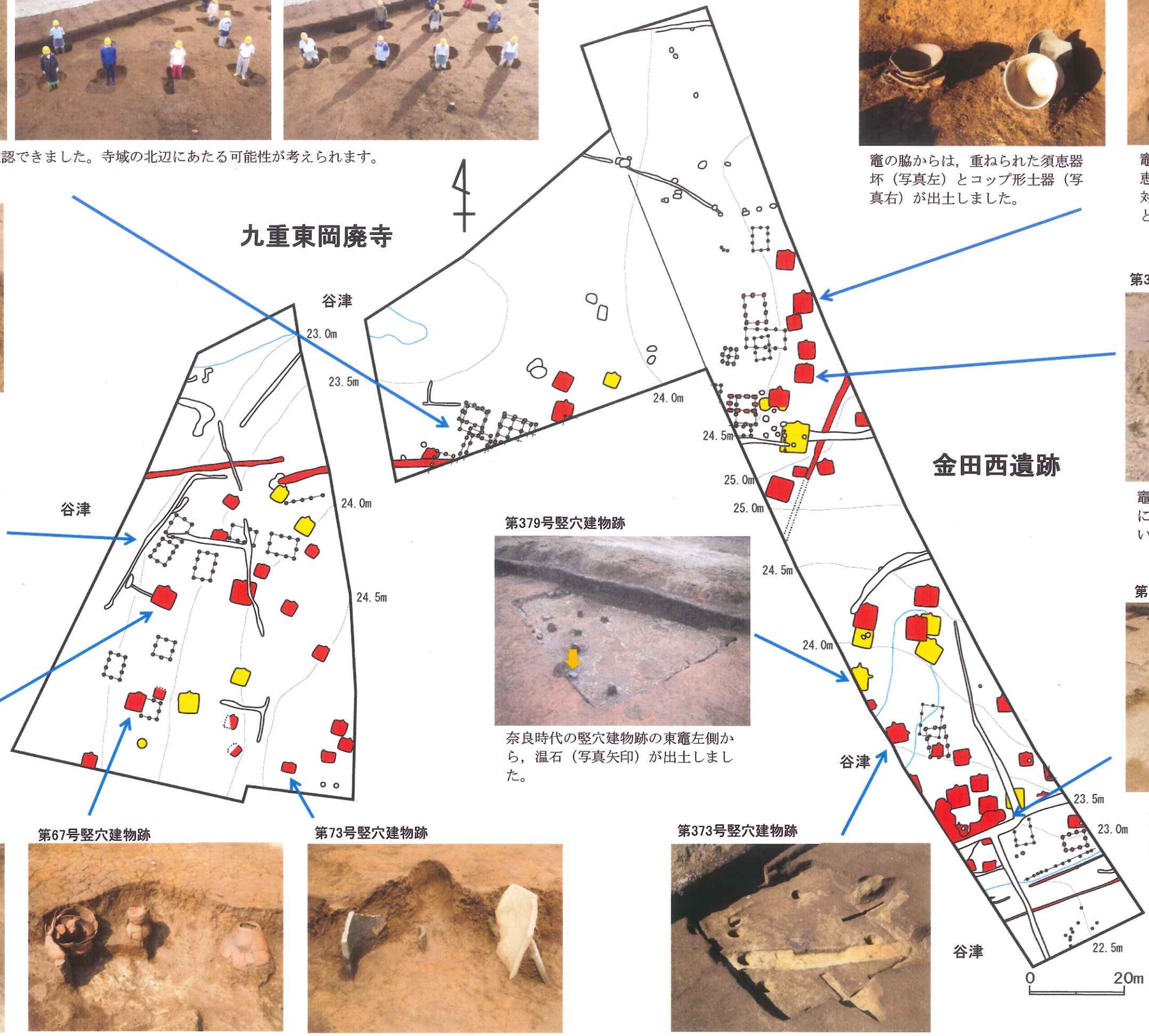
側柱建物跡７棟と総柱建物跡１棟が確認できました。寺域の北辺にあたる可能性が考えられます。

第30・31号掘立柱建物跡

立て替えられているため，柱穴同士が重複しています。

第17・21号掘立柱建物跡

２棟の小形の側柱建物跡です。建物の間隔が狭いことから，同時に２棟が建っていた可能性は低いです。



第340号竪穴建物跡

竈の脇からは，重ねられた須恵器坏（写真左）とコップ形土器（写真右）が出土しました。

第340号竪穴建物跡

竈の中からは，置かれた状態で須恵器坏などが出土しました。竈に対する当時の人々の信仰や儀礼などを垣間見ることができました。

第343号竪穴建物跡

竈の掘方調査の様子です。竈の支脚に須恵器高盤の脚部が再利用されていました。

第379号竪穴建物跡

奈良時代の竪穴建物跡の東竈左側から，温石（写真矢印）が出土しました。

第1号粘土採掘坑

広範囲にわたり，斜面部の粘土や砂が採掘されており，竈の構築材や柱穴の埋土に使用されたと考えられます。

第64号竪穴建物跡

斜面に構築された竪穴建物跡で，乳白色の粘土層を掘り込んで床面にしています。

第67号竪穴建物跡

第73号竪穴建物跡

土師器甕や瓦が竈の補強材や支脚に再利用されていました。

第373号竪穴建物跡

竈が北側から東側へ造り替えられていました。

遺構配置図（平成28年2月現在）